

看護とは何か、問いの流れ

—最終講義—

小玉 香律子

看護とは、というような根元的な問いを問うなど、今となっては気恥ずかしいことですが、私が大学を卒業した40数年前にはこれが大真面になされていました。もっとも、看護とは、とたずねる仲間のほとんどは、早々とこの問いに見切りをつけて、ほかの問いに乗り換えました。仲間？ それは、第二次世界大戦後、アメリカ合衆国による日本占領の影響のもと、1953年の春、東京大学医学部がいわば実験的に設けた看護の学科で学んだ仲間です。ほかの問いに乗り換えた？ それは、看護学なるものはまったく見えない、生理学や生化学は明快、基礎医学をやろう、あるいは、栄養学、公衆衛生学をやろう、といった次第のことです。

そう、東京大学医学部衛生看護学科には、その名に反して看護学はありませんでした。それどころか、看護が大学の中にあるのは不可解、学問ではないだろうに、という気配が周囲に満ちていました。ただ、いずれは看護の真実が明らかになって看護学が成立するだろう、しかしそのときの看護は、当時そここの病院でなされていたナースの仕事とは別のもの、たとえば健康管理、保健教育、もしくは限りなく医師の仕事に近づいた臨床活動なのではないか——そうしたイメージが学内にあったと思います。学科において看護学を率いていたのが湯楨ます先生でしたが、短期大学になったばかりの聖路加（現大学）から東大に赴いて大学課程看護学教育という実験を負われた彼女も、そのイメージにつきまとわれ、看護学の手がかりのないことに苦しんでおられました。看護の知識の体系がありますか、基礎看護技術ですって、我々はこんなことを身につけるために大学に来たのではありません、看護学がいまに明らかになるだろうということですが、それが医学とは別のものだと言い切れますか、などなどと学生の突き上げを受け、あなた達が探してほしい、と苦しみを隠されませんでした。

源泉の混沌

さてこの私ですが、私は衛生看護学科の3回生でして、先輩同輩が看護に見切りをつける様子を漫然と眺めていたのでしょうか。教養課程の授業は実に刺激的でしたし、

専門課程に入ってから医学の講義の数々は十分面白く、先生方は総じて魅力的でしたから、地方の高校からぼっと出てきた私には問題意識がなかったのです。けれども、口幅たくも言わせていただければ、ひとつひそかに独りごちていたことがありました。“いま病院でナースがしている看護なるものとまったく別の看護がバラ色の未来に待っているとは考えにくい。”

短い実習期間に垣間見るだけでしたが、大学病院のナースには迫力がありました。彼らは、相互に関係のないばらばら仕事、すなわち患者の世話もろもろと診療の補助いろいろな追われているとしか見えなかったものの、もし看護学があるとしたら、彼らがしていることの連続線上にであらう、この迫力には何かがある、と感じていました。問いの原初がそこにあったのです。しかし、卒業のときを迎えた私には看護の現場に飛び込む勇気がありませんでした。

結果的に私はモラトリウムを決め込むことになり、後知恵で言えば“読む”日々に入ります。いちおう“問い”をもってはいましたが、私はディレクタントになってしまったのです。慰み半分、興味本位でアメリカの看護の雑誌や書物を漁ったのですから。

半年後の秋、“読む”私は湯楨ます先生の基礎看護学講座の末席に連なります。そこは、看護とは何かを問わざるをえない、というより看護とは何かと四方八方から迫られている“砦”でした。講座メンバーはアメリカの文献を積み上げて論議し、ナースの仕事の分析や入院患者の満足度調査に精を出し、また how ではなく why を解説する看護方法のテキストをつくるなど努力したと思いますが、少し乱暴に言えば、看護は所せん東京大学のニーズに合わないということで、衛生看護学科は発足10年目に保健学科と名称を変えてしまいます。東京大学医学部は堪え性がなくて看護を捨てました。

しかしながら、“看護とは”は基礎看護学講座を重要な足場の1つにして、着々と明らかにされつつあったのです。そのプロセスに私はかなり深くかかわっていたと思います。

看護とは何か、問いの流れ

フロレンス・ナイチンゲールに出会う

ことは順序だてて起こったわけではありませんが、直線化してみれば、看護についての2つの書物から私の問いは流れ始めました。基礎看護学講座に入った私はまず、先生の書棚にフロレンス・ナイチンゲールの著作、Notes on Nursing をみつけます。在学中には1度もその名をきいたことがありませんでしたけれども、ナイチンゲールは知っていました。ただし、その著作が私を引きつけたのは彼女の名ではなく、What It Is and What It Is Not という副題です。看護が何であるかわからないのに、そこには看護であること What it is ばかりか、それが看護でないこと What it is not と区別までされて書かれているらしいのでした。それも19世紀半ばの著作なのです。

ぴんときたともいうほかない衝動に駆られて、私は Notes on Nursing を少しずつ読んでいきました。翻訳したということです。ようやく数が増えてきていた看護の雑誌の1つがそれを連載してくれ、1968年に1冊にまとめられました。『看護覚え書——看護であるもの・看護でないもの』です。いまなら、本当の看護とそうでない看護、あるいは、専門職レベルの看護と仕事かたづけ型の看護、とでもしたいところです。実は後になって、大正の初めに日本赤十字社の内科の医師が『看護の菜』と題してこれを全訳していたことがわかったのですが、私の仕事は実際に初訳でした。

『看護覚え書』との出会いは私の看護学事始です。ナイチンゲールは書いていました——病人の苦しみのほとんど、もしかしたら全部は、病気のせいではなく病気とは別のことが原因なのだ。別のこと、それは呼吸する空気、陽の光、暖かさ、静かさ、からだの清潔、部屋の清潔、食べることのできる食事、あるいはまた、気分転換、安心などのどれかが欠けていることです。そして、それら病気とは別の事からくる病人の苦しみを取り除くのが看護だと彼女は言っていたのです。つまり、病気の人、また若い者（と彼女はいつも並べており、現代の我々はここに高齢の方と補って読むわけです）に、呼吸する空気、陽の光、暖かさ、清潔、適切な食事、気分転換、安心などをとどこおりに与えること、まとめていえば、病人の回復、若い者の健康な成長（高齢な方の健康な老い）のために、病気とは別のことからくる苦しみのない状態にその人を置く、これが看護なのでした。

病気とは別のことからくる苦しみのない状態、これを彼女は最善の状態と表現するのですが、この最善の状態に置かれたとき自然がその人に最もよく働きかける、と彼女は説明するのです。小文字で書かれたこの nature が意味するのは、人間が内にもつ復元力といってよいよう

です。nature を復元力と読む解釈の確認は、ヒポクラテスまでさか上って尋ねる必要がありました。

要は、ナイチンゲールが看護について次のような仮説をたてていたことです。「看護のしなければならないことは、自然が患者に働きかけるように最善の状態に彼を置くことである。」

『看護覚え書』に拠る“看護とは”は、漸次増えていったナイチンゲール研究者の功があって、10年ほどで日本の看護界に広がったと思います。ただ、この仮説と、看護は病気とは別のことからくる病人の苦しみを取り除くというだけでは、我々ナースは、1つ、現実のばらばら仕事——患者の身のまわりの世話もろもろ、ナイチンゲール後の100年に著しくパワーアップした医師の診断・治療へのかかわりごとこまごま——と結びつけて、看護はこれだ！と膝を打つことはできなかったでしょう。また、2つ、それだけでは、大学の中の看護とはの答とするには、看護学の体系あるいは研究が踏まえるべき看護の概念構造が見えにくかったでしょう。“でしょう”としたのは、実際はそうではなく、我々は膝を打つことができました。そうできるようなあるめぐりあわせがあったからです。とくに私にはあったからです。

ヴァージニア・ヘンダーソンと出会う

『看護覚え書』をばらばらしていた卒業2年目、1961年の5月、湯植ます先生がメルボルンで開かれた国際看護師協会(ICN)の大会に出席、ヴァージニア・ヘンダーソン著の小冊子、Basic Principles of Nursing Care を持ち帰られ、すぐ訳出するようにと私に指示。『看護覚え書』の場合と違い、こちらは否応なく読まされたのですが、「病気が何であるかにかかわらず誰もが必要とする基本的な看護は、ユニバーサルな人間の欲求に根ざす」という最初の文章にぞくっとしました。『看護の基本となるもの』と題してその年の10月に出版、おそらく世界で最も早い翻訳出版だったでしょう。

ICNは、世界的に高まっていた（私が大学の片隅で感じていたのと同じ）“看護とは何か”の声への答えとして、この小冊子をアメリカはエール大学看護学部でヘンダーソンに書いてもらったのです。追い追いたずねあててみると、1955年に出版された彼女のテキスト、The Principles and Practice of Nursing 第5版の“看護とは”が、ヨーロッパ在のICN理事会にその決断をさせたのでした。

ヘンダーソンはほとんど経験的に、看護のばらばら仕事を整理させる観点をみつけていました。

・ 1つ、看護は、多くの場合は病人の、基本的欲求を満たすための生活行動、呼吸する、食べる、排泄する、眠る、清潔を保つなどを助けている。意思を伝達し感

情を表現する、信念を守る、職業などの生産的な活動や楽しみの活動をするといった基本的欲求を満たすための生活行動も助けている。ばらばらな看護行為をつなぐ共通項の1つは、基本的欲求を満たすことだ、と。

- 2つ、基本的欲求を満たすための生活行動は、からだの中の生理的な平衡および外界との関係上に成立つ感情の平衡を保つ、あるいはそれが壊れていけば取り戻す、あるいは新たな平衡をつくり出すための行動である。ばらばらな看護行為をつなぐ共通項のもう1つは、生理的ならびに感情の平衡の保持ないし再編成を助けることである、と。
- 3つ、生活行動を通して基本的な欲求を満たし、また平衡を保つことは、本当に健康であれば、すなわち体力、知識、意思力に不足がなければ誰もが自分でできることである。生活行動を助ける看護はその人の自立をめざす。ばらばらな看護行為の共通項はさらにもう1つ、その人の自立という方向をもつことである、と。

加えて、看護がその人の生活行動を助けるプロセスは、とりもなおさず医師による診断・治療を支えて成功させるプロセスであるのでした。そうした看護がなければ、多くの診療は効果をあげにくく、また多くの診療行為は人々にとって耐えがたくつらいものであるに違いありません。看護は診療のいわば土台であり、したがって誰にもいつも必要、診療は人々がときに必要とするものなのです。

以上からヘンダーソンは看護を定義していました。「看護とは、患者が生活行動をする上で、また医師による治療法を実行していく上で、体力、知識、意思力に不足のあるところを補うことである。」

この看護の定義は、ICNの思惑通り世界のナース達とその周辺をほどなく納得させました。定義というかたちゆえに受け入れられやすかったことがあるでしょう。仮説に比べて、の話です。日本の我々ナースもヘンダーソンの看護にうなずいたのでしたが、日本の場合そこに、ナイチンゲールの看護を読み解いていく過程が重なりました。我々は、ナイチンゲールの『看護覚え書』とヘンダーソンの『看護の基本となるもの』とをほぼ同時に手にし、前者の仮説と後者の定義を考え合わせることによって、相乗効果的に“看護とは”をつかんだのです。先に言った“あるめぐりあわせ”とはこの相乗効果的理解のことです。ナイチンゲールの“自然が働きかけるような最善の状態”は、ヘンダーソンにおいては、1つ、人間としての基本的欲求が満たされている状態、2つ、からだに心に平衡がある、あるいは平衡の取り戻しもしくは新たな平衡の再編成が進んでいる状態、3つ、各人の個が認められ、自由度が高く、結果的に自立の度合いの高

い状態、なのでした。2つの書物の間にはちょうど100年があります。その100年の間の諸科学と社会の進歩を踏まえてヘンダーソンはあのような観点をみつけたのでしたから、その“看護とは”は20世紀後半の現実としっかりつながっており、もはや我々ナースはそれをむやみに問うことはしなくなりました。あとは実行あるのみ、というわけです。自然が働きかけるような最善の状態のより詳細な説明、病気とは別のことからくる病人の苦しみの解明、最善の状態をつくり出す方法の研究などが、看護の研究として精力的に行われるようになったのは当然です。

問いは問いを生む

けれども、ディレクタントの尻尾をつけた私にとっては、“看護とは”はまだまだ問いであり続けました。私は、いつしか発足していた研究グループの中でナイチンゲールのその他の著作を読み進めるとともに、『看護覚え書』に看護とはを繰り返し問いました。やがて確信することができたのは、彼女はあの仮説の根底に“看護は病気をみるのではなく病気の人間をみる”という命題をもち、自然が働きかけるような最善の状態に患者を置くとはどういうことかを語りながら、“看護は人間をみる”を浮き彫りにしているということです。そこには当然、看護と、人間をではなく病気をみる医業との対比が暗示されていました。明示ではなく暗示です。

- 人間をみる看護のやりそこないは病人のからだよりは心を痛めつける（診断・治療のやりそこないはまっすぐ病人のからだを痛めつける）
 - 人間をみる看護は病人のいかに痛むかをいかに看護するかの中に抱え込む（診断・治療は病人のいかに痛むかをいかに診断・治療するかの外に置く）
 - 看護は病人の重荷を肩代わりする（診断・治療は病人の負う力を高めようとする）
 - 看護は病人1人ひとりに固有、あらゆる病気にほぼ共通（診断・治療は病気の1つひとつに固有、あらゆる病人にほぼ共通）
- などなど。

いうまでもなく、看護と医業のこのような対比は、どちらかということであり、あるいはどちらを優先させるかという問題ですけれど、優先性を見極めることはすぐれて今日的な発見のひとつだと私は思ったものです。なお“看護は人間をみる”はヘンダーソンでは前面に出されていて、あの相乗効果理解はこの点でも顕著でした。

“看護は人間をみる”は、1980年にアメリカ看護師協会が「看護とは、健康問題（代表は病気）そのものをではなくそれに対する人間の反応を診断し手当することで

看護とは何か、問いの流れ

ある」とする定義を発表し、看護学的に前へ進められました。健康問題に対する人間の反応、つまりその人の体験を看護はみるのです。また、ここに診断と出てきたことから、看護のみる健康問題体験の分類と命名の動きが看護学にセットされた、と私は思いました。この看護の定義の載ったアメリカ看護師協会の声明書は、その発表直後にたまたま、当時はカンザスシティーにあった協会本部を訪ねた私が入手し、すぐ訳しました。ナイチンゲールの「病気の看護ではない、病人の看護である」（晩年の著作にあるフレーズ）が「看護は健康問題に対する人間の反応をみる」へと進んだ道筋には、ヘンダーソンの、「看護はユニバーサルな欲求に基づく人間の生活行動をみる」があずかっていることは、定義の前文にも明らかでした。

翻訳するということ

ここで、翻訳について触れるべきでしょう。時間の無駄遣い、業績にはならないといわれる翻訳についてです。看護とはを問いつつ私は海外文献を多々読み、結果的にしばしば翻訳したことになったのですが、翻訳対象には2種類ありまして、先ほどのアメリカ看護師協会の声明書のように、看護とはという問いゆえに訳出しておかなければならなかったもの、これが1つです。この種の翻訳は、ナイチンゲールの看護とヘンダーソンの看護の「歴史的概念普及」を確かめることにつながり、研究的に興味深い仕事なのです。

もう1つは、やはりあの問いゆえではありますが、原著者に心底共鳴し、とくに求めてその人の著作を網羅的に訳す、そういう種類です。私はヘンダーソンの論文のほとんどを訳出しました。そう、翻訳は確かに時間の無駄遣いかもしれませんが、原著者に共鳴してするそれは、単なる言語の移し換えではありません。原著者の言説に彼ないし彼女の息吹を感じ、実際に目見えているかのような出会いを喜びつつ、その述べるところにうなずきながら、問答さえしながら、私の日本語で表現するのです。僭越を意識しつつも、彼ないし彼女の仲介者にすぎない自分を忘れてしまいそうにもなります。

ヴァージニア・ヘンダーソンに私が打ち込んだのは、大学の教員である以上に看護実践家であった彼女の、実践してこそその看護であるとする姿勢のゆえです。看護を理論的に説明する道を開いた彼女が、看護は実践してこそ、と言っているのです。いわば、「理論の情報のある実践、実践の情報のある理論」という看護学のメッセージを彼女から受け取って、実践者にならなかった私が、それゆえの共鳴をしたのでした。ヘンダーソンに打ち込んだのはもう1つ、彼女の看護探究の歩みに人間味があふれていたからです。どんなふうにも、話す時間がない

のが残念ですが、エール大学が彼女に贈った名誉博士号の証書には、「あなたはケアの科学がヒューマニティを失わないことに貢献した」とありました。人間をみる看護、その具体は生活行動援助、実際の作用は、その人と交わる、その人が学ぶのを助ける、世話をする、とみえてくる途上のいつからか私は、看護の人間味に魅せられていたのです。

気がつけば、「看護とは」をたずねて私は40年以上も考えてきました。看護学もいまでは断片性に価値を置くサイエンスとして立って立って立って、看護現象の細部の研究が盛んに積み重ねられています。そうした中でこの私は、何とも中世的な、総合性に重きを置く問い方をし続けてきたものです。しかし、断片性に価値を置く最新の看護学も、「看護とは」の問いを無意識に引き継いでいるのでして、おこがましい言い方ですが、私のしてきたことは、それら新しい研究の成果を選び集めて、根元的な問いの流れに加えていくことでもあったと思います。発見のある楽しい仕事でした。



小玉香津子教授の最終講義

平成15年3月18日、名古屋市立大学看護学部308教室